

# 別事 井上道義、平壤でベートーヴェン『第九』を北朝鮮初演

## 特記 2010年に続いて、朝鮮国立交響楽団に2度目の客演

取材：文＝石野裕一  
Text＝Yuchi Mano

指揮者の井上道義が、2013年3月8日、北朝鮮・平壤の人民劇場で、ベートーヴェン「交響曲第9番《合唱》」を指揮した。「すべての人々は兄弟になる」と歌い上げるこの作品が北朝鮮国内で演奏されるのは、実に今回が初めてのことという。

演奏したのは、1946年に創設されてロリン・マゼールやジョン・ミヨンファンなども客演している朝鮮国立交響楽団。井上は2010年秋に初めてこの楽団に招かれ、ドヴォルジャーク《新世界交響曲》などを演奏したが、オーケストラの高い能力に驚く一方で、国交のない日朝関係がどん底まで冷え切っているも、芸術家だからできる交流だけは絶やすべきでないと考え、「次はぜひ『第九』初演を」という朝鮮側の懇請を、批判覚悟で受け入れた。

合唱を担当したのは万寿台芸術団所属の声楽家約120名で、同団所属のソプラノ金錦周、アルト韓玉姫が、日本から参加したテノール永田峰雄、バリトン牧野正人とともにソリストをつとめた。井上による5日間のリハーサルは多くは声楽を伴う第4楽章に費やされたが、モスクワ留学組の女声ソリストは別にして、合唱のメンバーは初めて歌うドイツ語の歌詞にかなり苦労した様子だった。しかし、練習を重ねるにつれて、朝鮮半島出身の声楽家に特有な張りのある力強い歌声が聴かれるようになり、井上は不安なく本番を迎えることができたのである。



喝采に包まれた人民劇場。カーテンコールに応える出演者たち（中央が井上道義）



2012年4月にオープンしたモダンな人民劇場



リハーサルから



朝鮮国立交響を指揮する井上道義



『第九』の北朝鮮初演が行われた人民劇場

「多くの価値観の違いを持つアジアの国々の見えない壁、見えては安易には考へていない。しかし愛するシヨ

平壤中心部の再開発エリアに建つ人民劇場は、2012年4月にオープンしたばかりのコンサート専用ホール。広い舞台と豊かな残響、ゆったりとした客席が特長の大ホールは1500人収容で、500人収容の小ホールも併設している。ロビーも広々としているが、喫茶コーナーや売店が皆無なのはお国柄か。プログラム類の印刷物も一切ない代わりに、演奏前に出演者のプロフィールや曲目解説がステージ上の字幕で紹介され、女性司会者が舞台から聴衆に語りかけるのは中国式に近い。意外だったのは、共産党関係の招待客ばかりかと思われた客席のかんりの部分を、音楽

愛好家の一般市民が占めたこと。高額のチケットを買えるのはごく一部の富裕層に限られるとはいえず、聴衆が創る音楽会の雰囲気は慎ましくも真摯なもので、『アリアン』に続いて『第九』の演奏が始まると、そこにはただただベートーヴェンの音楽だけが存在し、演奏が進むにつれて場内の集中度が高まる様子が肌で感じられた。演奏会当日の未明には、北朝鮮が2月に行った核実験に対する国連安保理の制裁決議が可決され、我が国も経済制裁をさらに強化するというタイミングだっただけに、井上の訪朝に對しては一部から強い非難の声が上がった。賛否両論あるのは当然のこととして、井上が地元紙に寄稿した音楽家としての真情を紹介することで、この小文を締めくりたい。

スタコウイチが、ソ連の体制内で自分の考えを信じ、力強い作品を残したように、僕も今考えられる限りの理想主義に徹して運命に向かいたい」